

京都府埋蔵文化財情報

第125号

中世京都のおもてなし～小さな展覧会企画展を振り返って～-----伊野近富・松尾史子-----	1
花のない桐文をめぐる-----小山雅人-----	7
平成26年度発掘調査略報-----	17
1. 下水主遺跡第1・4・5次(A・B・C地区)	
2. 大川遺跡第5次	
3. 出雲遺跡第18次	
4. 法成寺跡・寺町旧域	
長岡京跡調査だより・121-----	24
普及啓発事業(平成26年8月～11月)-----	26
センターの動向(平成26年7月～10月)-----	29

2015年1月

公益財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

中世京都のおもてなし

～小さな展覧会企画展を振り返って～

伊野近富・松尾史子

1. はじめに

当調査研究センターが毎年夏に開催している「小さな展覧会」では、前年度に京都府内で行われた発掘調査成果を紹介している。展覧会では、近年、速報展示と併せて小規模な企画展示も行っており、今回は、「中世京都のおもてなし」と題して、昨年度の調査成果を中心に京都府内出土の中世土器の様相を紹介した。また、新たな試みとして3Dコーナーを設け、当調査研究センターが八幡市女谷・荒坂横穴群や同美濃山瓦窯跡などで実施した3次元デジタル測量の成果を紹介した。

展覧会は平成26年8月16日(土)～9月7日(日)に向日市文化資料館で行い、1,824名の方々に観覧していただいた。

ここでは、展覧会を振り返りながら展示によって得られた成果について概観しておきたい。

2. 速報展示：3Dコーナー

平成25年度に京都府内で当調査研究センターおよび関係各機関が実施した発掘調査、整理作業では縄文時代から江戸時代におよぶさまざまな時代の成果があった。今回は、そのうち28遺跡と今年度京都府立鴨沂高校で実施された法成寺跡・寺町旧域の調査成果を紹介した。

28遺跡のうち、丹後地域は2遺跡、丹波地域は4遺跡、山城地域は調査件数が多いという現状を反映して22遺跡である。展示品は約400点を数え、時代は調査成果を反映して中世が多くなった。

3Dコーナーでは、八幡市女谷・荒坂横穴群の3次元デジタル測量データを加工してムービーを作成し、^(注1)パソコンの画面上で丘陵斜面に掘り込まれた横穴群を360°回転して見ていただいた。また、横穴から出土した石棺の3次元デジタルデータを実際にパソコンを操作しながらさまざまな角度から見てもらえるようにした。3次元デジタル測量データについては、画面上で見ただけでなく、立体視画像にしたり3Dプリンターで模型を作るなど、今後、普及啓発に活用できるものとして期待されている。

3. コーナー展示：中世京都のおもてなし

中世の京都には都を中心に北に丹波国・丹後国、南に山城国があった。京都で出土する中世土器は、この旧国単位でそれぞれ地域色がある。今回の展示では、ただ地域ごとに並べるだけではわかりにくいので、絵巻物を併せて展示し、どのように器が使われているのか視覚的にわかるように工夫した。

中世の土器は土師器・瓦器・瓦質土器・須恵器・国産陶器・輸入陶磁器など多種多様であるが、中でも地域色がよく現れるのは土師器皿と瓦器碗である。展示にあたっては、地域ごとの特徴が



第1図 絵師の宴会の様子：土師器皿や瓦質土器火鉢がみえる（『絵師草紙』国立国会図書館デジタルコレクションより）

穴が見つかることがある。壊れていないものが多く、1度限りの使用で捨てられている。時期は少し新しくなるが、室町時代に日本を訪れた朝鮮王朝の使節が書いた『海東諸国紀』には「人は貧富と関係なく宴会を好み、(中略)飲食には漆器を用い、(中略)尊処には土器を用いる。ひとたび用いればすぐ捨てる」と書かれており、日本人は宴会好きで、身分の高い人との宴会には土師器を使い、1度限りで捨てたというのである。彼らもまた日本人のおもてなしを受けたことであ



第2図 坊舎での宴会の様子：土師器の皿や青磁の鉢が描かれている（『慕婦絵詞』巻6 国立国会図書館デジタルコレクションより）

わかるように心がけた。また、時代については昨年度の調査で出土した遺物を中心としたため、結果的に鎌倉時代の土器を中心に展示することとなり、必要に応じて平成24年度以前の調査で出土した室町時代の土器も展示した。

さて、「おもてなし」というと茶の湯を思い浮かべることが多いかもしれないが、鎌倉時代には茶湯は「唐土(中国)の礼」であり、日本では「酒をもって一切の志をあらわす」(注2)ものであると考えられていたようである。当時の宴会では酒器として日常の器である土師器皿が使われていたと考えられ、この時期の遺跡では多量の土師器皿を廃棄した

穴が見つかることがある。壊れていないものが多く、1度限りの使用で捨てられている。時期は少し新しくなるが、室町時代に日本を訪れた朝鮮王朝の使節が書いた『海東諸国紀』には「人は貧富と関係なく宴会を好み、(中略)飲食には漆器を用い、(中略)尊処には土器を用いる。ひとたび用いればすぐ捨てる」と書かれており、日本人は宴会好きで、身分の高い人との宴会には土師器を使い、1度限りで捨てたというのである。彼らもまた日本人のおもてなしを受けたことであろう。『絵師草紙』や『慕婦絵詞』などの室町時代の絵巻物には、宴会などのおもてなしの器として土師器が描かれている(第1～3図)。

鎌倉時代にはまだ茶は寺院以外には普及しておらず、瓦器碗と同じく、中国製の青磁や白磁の碗は、飯茶碗として使用していたようである。

茶の湯が成立する以前の中世の「おもてなし」の風景は、当時の人々が日常生活及び宴会などの特別な場で使用した土器の中に垣間見ることができる。

1) 中世都市京都の器

都である中世都市京都で出土する食器は、土師器皿がもっとも多く、瓦器碗はあまり多くない。絵巻物には土師器大皿に飯を盛った

ものもある。また、漆器碗などもあったと思われるが、出土量は少ない。京都の土師器皿は回転台を使わずに、てづくねで作られており、製作時についた指の圧痕が外面に残る。京都とその周辺では、てづくねの土師器皿が使われる。全国的に見ると、その他の地域の土師器皿は回転台で作るのが基本で、底部外面に糸切り痕が見られる。

この他、富裕層を中心に中国製や朝鮮半島製の白磁・青磁などの輸入陶磁器が使われていた。

調理具には土師器や瓦質土器の鍋や釜、播磨産須恵器のすり鉢があり、貯蔵具には

常滑産の甕がある。室町時代になると新たに常滑産・備前産・丹波産・信楽産などの陶器のすり鉢、甕、壺が加わり、少量ながら古瀬戸の碗、鉢、おろし皿も使われた。

2)山城国の器

山城国の食器は、鎌倉時代は土師器皿や瓦器の碗・皿が中心で、多量に出土する。土師器皿は、てづくねであるが、平底である京都と形は少し異なり底が丸みを帯びている。瓦器は、器の内面と外面を燻した黒い焼き物で、内面にはジグザグ模様やらせん模様がある。北部では楠葉型と呼ばれる大阪府枚方市周辺で生産されたものが多く出土するが、南部では大和型と呼ばれる奈良市周辺で生産されたものが多く出土する。鍋や羽釜は瓦質土器で、山城産のほか河内産や摂津産がある。すり鉢は播磨産須恵器である。甕は土師器が多く、少量だが常滑産の陶器がある。輸入陶磁器は中国製白磁や青磁が占める。

室町時代になると瓦器碗はなくなる。漆器や木製の碗の普及が背景にあると考えられる。羽釜は山城産のほか大和産も出土し、すり鉢は信楽産や備前産の陶器になり、瓦質土器の鉢も少量ながら出土する。また、新しい様相として古瀬戸の碗、鉢、おろし皿が使われるようになる。

山城国については京田辺市門田遺跡・精華町椋ノ木遺跡を中心に展示した。両遺跡とも木津川中流域に位置する集落で、平安時代後期から室町時代の掘立柱建物や溝などを検出している。土師器皿は、てづくねの土師器皿である。瓦器碗は、門田遺跡では楠葉型と大和型の両者が、椋ノ木遺跡で



第3図 僧侶の衝重（お膳）には土師器の碗・皿が見られる（『慕婦絵詞』巻2 国立国会図書館デジタルコレクションより）



写真1 門田遺跡の土器



写真2 出雲遺跡の土器

などがあり、寺院や城館などで出土する傾向がある。

調理具である鍋や釜は丹波産の土師質土器、瓦質土器、すり鉢は播磨産須恵器である。貯蔵具の壺や甕は丹波産の須恵器や常滑産の陶器などがある。

室町時代になると漆器などの木製椀が一般に普及するためか瓦器椀はなくなるが、土師器皿は引き続き京都系が使われる。壺や甕は丹波産の陶器が主流となり、他には備前産が少量ある。

今回紹介した亀岡市出雲遺跡は大堰川左岸の河岸段丘上に位置する集落で、平安時代末の溝から土器がまとまって出土した。土師器皿は、てづくね成形と回転台成形が混在している。瓦器椀は丹波型である。輸入陶磁器が一定量出土しており、調査地周辺に屋敷地があった可能性がある。

4)丹後国の器

丹後国の食器は、鎌倉時代は土師器皿や丹後特有の黒色土器(内面が黒色のいわゆる内黒が多い)の椀・皿が中心である。土師器皿は地元産の回転台で作るものと京都系の両方がある。黒色土器があるため瓦器椀はほとんどない。

輸入陶磁器には、中国製白磁や青磁があり、役所関係や寺院・城館などで多く出土する傾向がある。調理具の鍋・釜は瓦質土器を使用しており、すり鉢は播磨産須恵器である。貯蔵具である壺や甕には丹波産の須恵器や常滑産・越前産の陶器などがある。

室町時代になると黒色土器はなくなる。瓦器椀と同じように背景に木製の椀の普及があると考



写真3 大川遺跡の土器

は大和型が出土している。

3)丹波国の器

丹波国の食器は、鎌倉時代は土師器皿や瓦器の椀・皿が中心である。土師器皿は、一部で地元産の回転台で作るものも使うが、城館などでは、てづくねの土師器皿(以下京都系とする)が多量に出土する。瓦器椀はこの地域特有の丹波型を使用している。

輸入陶磁器には中国製白磁・青磁の椀・皿

などがあり、寺院や城館などで出土する傾向がある。

調理具である鍋や釜は丹波産の土師質土器、瓦質土器、すり鉢は播磨産須恵器である。貯蔵具の壺や甕は丹波産の須恵器や常滑産の陶器などがある。

室町時代になると漆器などの木製椀が一般に普及するためか瓦器椀はなくなるが、土師器皿は引き続き京都系が使われる。壺や甕は丹波産の陶器が主流となり、他には備前産が少量ある。

今回紹介した亀岡市出雲遺跡は大堰川左岸の河岸段丘上に位置する集落で、平安時代末の溝から土器がまとまって出土した。土師器皿は、てづくね成形と回転台成形が混在している。瓦器椀は丹波型である。輸入陶磁器が一定量出土しており、調査地周辺に屋敷地があった可能性がある。

4)丹後国の器

丹後国の食器は、鎌倉時代は土師器皿や丹後特有の黒色土器(内面が黒色のいわゆる内黒が多い)の椀・皿が中心である。土師器皿は地元産の回転台で作るものと京都系の両方がある。黒色土器があるため瓦器椀はほとんどない。

輸入陶磁器には、中国製白磁や青磁があり、役所関係や寺院・城館などで多く出土する傾向がある。調理具の鍋・釜は瓦質土器を使用しており、すり鉢は播磨産須恵器である。貯蔵具である壺や甕には丹波産の須恵器や常滑産・越前産の陶器などがある。

室町時代になると黒色土器はなくなる。瓦器椀と同じように背景に木製の椀の普及があると考

えられる。壺や甕などは丹波産の須恵器が減り、越前産、丹波産や備前産の陶器が使われるようになる。輸入陶磁器は、中国製白磁・青磁のほか少量ではあるが高麗や朝鮮王朝の青磁・白磁などがみられる。

今回の展示で紹介した舞鶴市大川遺跡は由良川中流域に立地する集落で、平安時代後期から室町時代の掘立柱建物や土坑などがみつまっている。

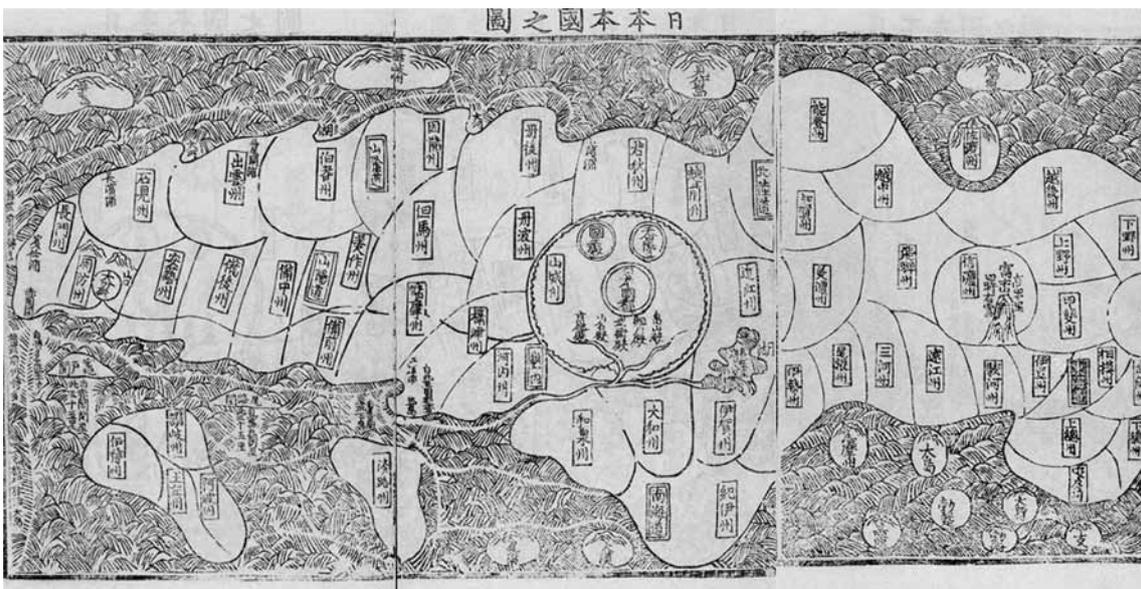
土師器皿は基本的に回転台で作ったもの

で、瓦器碗はなく黒色土器を使用している。土師器皿をまとめて廃棄した土坑が見つかり、出土した土師器皿40枚のうち3枚のみが地元産の回転台で作ったもので、その他は全て、てづくねで作った京都系土師器皿であった。



写真4 大川遺跡：土師器皿出土状況

また、輸入陶磁器が破片ではあるが400点以上出土したことは注目される。中国製陶磁器のほか、象嵌青磁・粉青沙器などの朝鮮半島製陶磁器が含まれる。丹後地域で輸入陶磁器が400点以上出土したのは現在のところ宮津市中野遺跡と大川遺跡のみである。中野遺跡は当時丹後の中心であった府中に近く、港にも近いことから国府に関連する港湾施設が付近にあった可能性がある。大川遺跡は由良川の河口から8.5kmの辺りに位置するが、一帯を支配していた大川神社と関係する屋敷があった可能性があり、多量の輸入陶磁器を入手しやすい背景があったと考えられる。また、朝鮮半島製の高麗の象嵌青磁については、都周辺で出土するところは限られており、丹後地域での出土は中野遺跡に次いで2例目となる。近年、島根県中須西原遺跡（輸入陶磁器の20%が朝鮮半島製）など日本海沿岸で日常品を含む朝鮮半島製の陶磁器がまとめて出土しており、今回の資料は当時の日本海側の物流を考える上で興味深い。前述の『海東諸国記』には朝鮮王朝の命を受けた商人が京都へ向う際に、通常のルートである瀬戸内海ではなく、北海航路を使って若狭国に到着したことが書かれている。ちょうど応仁の乱が勃発した頃であり、危険を回避するためであったと思われる。第4図には博多から島根・鳥取・兵庫を経て、宮津から舞鶴あたりを目指した航路が描かれている。丹後地域で朝鮮半島の製品が出土するのは背景にこのような日本海沿岸の物流があったためと考えられる。



第4図 『海東諸国記』に描かれた日本海側の航路（国立国会図書館近代デジタルライブラリーより）

5) 中世の宴会と土師器皿

宴会で使用した土器を1度限りで捨てることがあったと先に紹介したが、このような土師器皿の一括廃棄は12世紀後半頃から多く見られる。都とその周辺以外では、前述の大川遺跡のように地元産の土器ではなく京都系土師器皿を使用していることがある。鎌倉や奥州藤原氏の拠点である岩手県柳之御所遺跡、中世の港湾都市である広島県草戸千軒町遺跡でも京都系土師器皿が出土している。さらに戦国期には大分県大友府内遺跡、山口県大内氏館跡、福井県一乗谷朝倉氏遺跡など有力大名の居館などで京都系土師器皿が出土する。これらは出土状況から宴会や儀式で使用したと考えられる。このような状況は各地域における政治・経済の中心地および京都と関係する寺社等が所在する地でみられる。特別な場面であえて京都風の土師器皿を使用することに意味があったのであり、そのことにより政治的あるいは文化的な要素で京都とのつながりを求めたと考えられる。

4. おわりに

中世の人々が宴会などで「おもてなし」に使用した土器は、日常の器であり、地域によって様々な特色があった。基本的には土師器皿や瓦器椀・黒色土器椀など地元で生産されるもので、青磁や白磁などの輸入陶磁器で彩りを添えていた。

室町時代になると茶の湯が一般にも浸透し、天目茶椀の出土が目立つようになる。そして、桃山時代には「侘び茶」が完成し、江戸初期には志野^{しの}や織部^{おりべ}といった造形や色彩豊かな陶磁器が加わる。現在の日本文化を代表する茶道の「おもてなし」の始まりである。

今回の展示で、一見地味な中世の土器を少しでも身近に感じてもらえたのではないかと思う。なお、この展示の基本構想は当調査研究センター総括主査伊野近富によるものであり、遺物の解釈を含め多くは伊野説に依拠している。

(いの・ちかとも＝当調査研究センター調査課調査第2係総括主査)

(まつお・ふみこ＝当調査研究センター調査課企画調整係主任)

注1 ムービーの作成にあたっては大阪電気通信大学総合情報学部デジタルゲーム科門林理恵子教授、コンピュータ・システム株式会社島津 功氏、株式会社文化財サービス山内基樹氏、京都府立山城郷土資料館森島康雄氏のご協力を得た。記して感謝したい。

注2 元徳四(1332)年二月十五日付「日興化儀三十七条案」『日向中原文書』(『講座 日本茶の湯全史 第一巻 中世』茶の湯文化学会編 思文閣出版) 2013

参考文献

伊野近富「原型・模倣型による平安京以後の土器様相」(『中近世土器の基礎的研究』V 中世土器研究会編) 1989

伊野近富「土師器皿」(『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編 真陽社) 1995

安田龍太郎「絵巻物にみえる器類と考古資料との比較研究序論」(『奈良国立文化財研究所創立30周年記念論文集』奈良国立文化財研究所 同朋社) 1982

花のない桐文をめぐって

小山雅人

1. 桐か蔦か、それとも蝶か

織田・豊臣政権時代、石垣・礎石建ち・瓦葺きの城郭や、大坂、京都、伏見の大名屋敷の急増に伴い、文様を持つ瓦も多く軒を飾った。その多くは平安時代以来の巴文であり、唐草文であったが、家紋と見られる文様も少なくない。

京都市上京区の内膳町遺跡は、平安～江戸時代の多くの一括資料を提供し、発掘調査以来30数年を経た今も、京都市内各時代の基準遺跡として土器、出土遺物の見学者が絶えない。出土遺物は土器・陶磁器にとどまらず、金箔瓦の好資料もある。本稿では、この遺跡に特徴的な軒瓦の文様について述べてみたい。

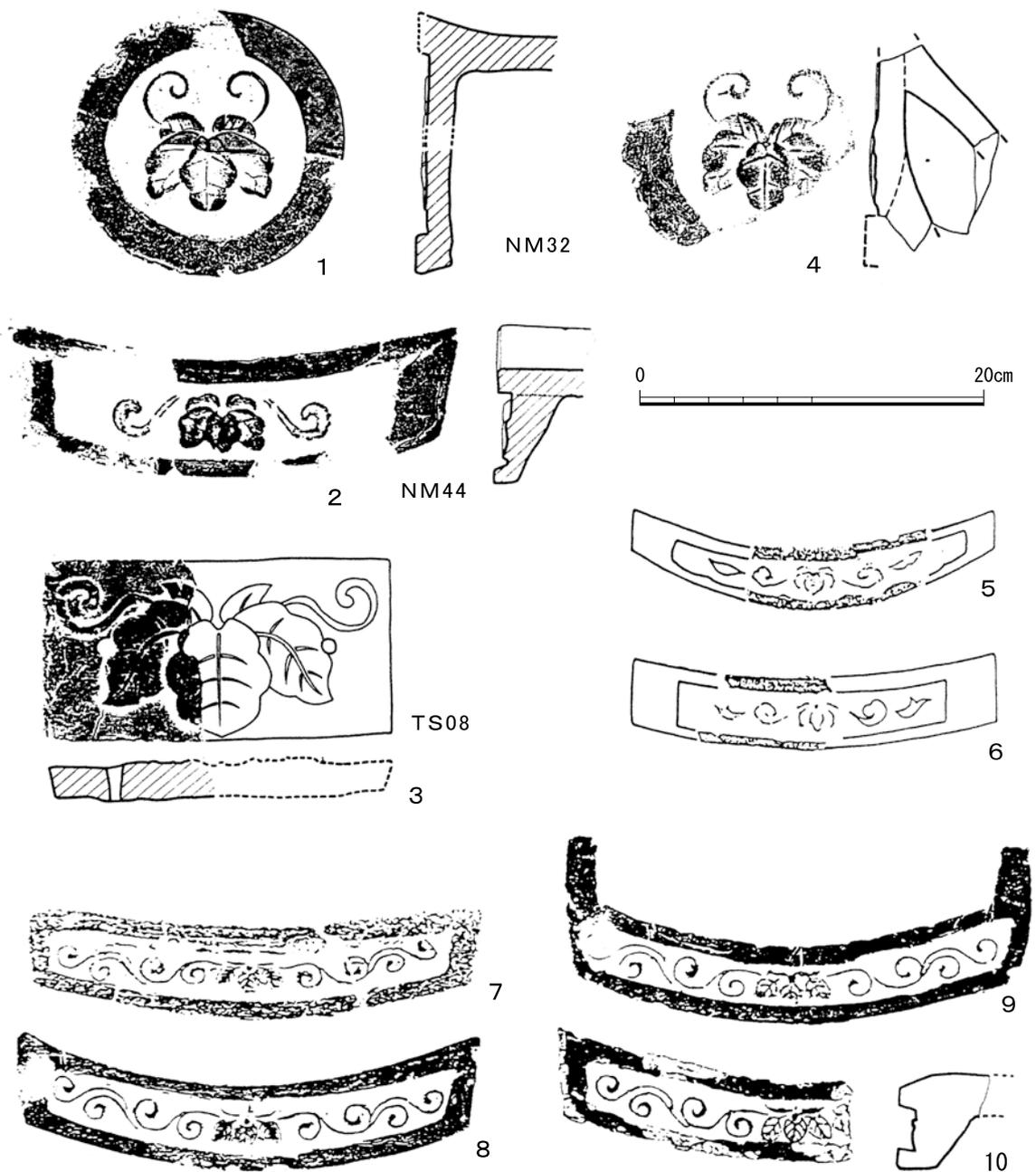
それは、花のない三葉の文様で、「花のない桐文」に見える。内膳町例には後方に2枚の小葉が加えられ、現行の「蔦文」(第3図4)そのもので、軒丸瓦の文様と軒平瓦の中心飾りおよび方形飾り瓦に用いられている(第1図1～3)。10数年前、山口県から資料調査に来られたが、内膳町の軒丸瓦と同文の軒丸瓦の拓本を持っておられ、萩城外堀地区から出土した鳥衾という(同図4)。後(2002年)に刊行された報告書を見ると、「桐胡蝶文」(第3図3)と報告されていた。^(注2)

最近、聚楽第本丸南面石垣の検出という成果を受けて、当センターが催した「小さな展覧会」において、この内膳町の瓦も陳列したが、キャプションには難儀した。結局、とりあえず「蔦文」で通したが、釈然とはしなかった。この文様は「花のない桐」にも「蔦」にも見え用語に困る。

しかし考古学関係では、瓦当文様に使われた場合ほとんどが軒平瓦の中心飾りであり「三葉文」と呼ばれることが多い。小葉が加わったのを「五葉文」という人もある。本稿では原則この「三葉文」「五葉文」を使う。また「家紋」の語以外には「紋」の字は使わず、「桐文」「蔦文」で通したい。

2. 織豊期左京内膳町の軒瓦

内膳町の軒瓦は、出土破片数が多いことや、多くが金箔瓦であることなどから、織田氏家紋の木瓜文の軒丸瓦(NM29)と、五葉文に唐草一転だけの軒平瓦(NH44、第1図2)の組み合わせが主要瓦と考えられる。このことから聚楽第城下時代のこの地は、織田信雄の屋敷と推定されている。^(注3)軒丸瓦(NM32、第1図1)は、瓦当下半を残す1点と上半部の破片3点で辛くも瓦当全体が報告されている(第2図1～4)。3枚の葉は2か所が対でくびれを呈する古風な表現で、相国寺出土の足利家の桐紋瓦(第3図7・8)の葉の表現とよく似ている。^(注4)三葉の上には対の小葉が覗いている。さらに内側に巻き込む一對の蔓(?)が上方に伸びているのがユニークである。萩城報告書がいうように、胡蝶に見えなくもない。この軒丸瓦は、文様から見る限り上記の五葉文軒平瓦NH44と組み合わせようと思われるが、上記木瓜文のNM29と同文の軒平瓦NH44がともに出土



第1図 蔦葉・桐葉文瓦(1)

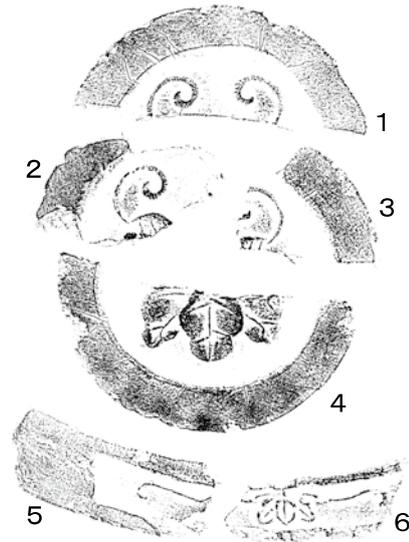
数も圧倒的に多く、いずれも金箔押しで、両者の組み合わせは否定し難い。従って、破片数4点のNM32は後述するNH31(破片数2点、第2図5・6)と組み合わせるのであろう。

今回試しに、この内膳町の軒丸瓦NM32と萩城の鳥衾の拓本をコピー機で実大にして重ねてみた。両者は、瓦当全体大きさ、上半の蔓ないし触角の形状、葉と葉脈の形状のいずれも酷似しており、同文どころか同范の可能性も大いにあるとの印象を得た。

内膳町の未報告の軒平瓦の中から、今回中心飾りと右半に一転だけの唐草文の1片を見つけることが出来た(第2図6)。共通する残存部分を観察すると、報告されているNH31(同図5)と同范と考えられる。中心は輪郭線で表現した三葉で、葉の中央の葉脈ははっきりしている。この葉

脈の途中に小さな団子状のものが見えるが(拓本では表わ
せなかった)、これが支脈の表現なのかはこれ1点では不
明である。むしろ重要なのは三葉の上部に上方と左右に伸
びる枝状のものが認められることである。これは、田中幸
夫・土橋健二郎の両氏が「桐葉文様」と呼び、黒田慶一氏
が花梗の可能性を指摘したものであろう。^(注5)黒田氏は「筒状
花の有無を桐紋・非桐紋の基準にしたい」(191頁)とされ
たが、この花梗をもつ例に限って桐紋の可能性を残された。

新たに判明した軒平瓦NH31の唐草が、金箔押しのNH
44と同様に一転のみであることは興味深い。内膳町からは、
一転する唐草を備えた五葉文の方形飾り瓦(第1図3)も出
土しているが、この唐草(蔓?触角?)は上方に伸びず、五



第2図 内膳町の蔦葉／桐葉文瓦図

葉の肩の辺りに置かれ、むしろ蔓に見える。そして内膳町と萩城出土のこれら5種の瓦(第1図1・
2・3・4、第2図5+6)は、おそらく同じものを表現していると考えられる。三葉部分が3
枚の葉が重なったように見える点では「桐」、いずれも五葉であり一对の唐草が蔓に見える点で
は「蔦」、軒丸瓦ないし鳥衾だけ見れば「桐胡蝶」、見ているだけではいずれとも決め難い。桐か
蔦か、それとも蝶か。

3. 全国の出土例

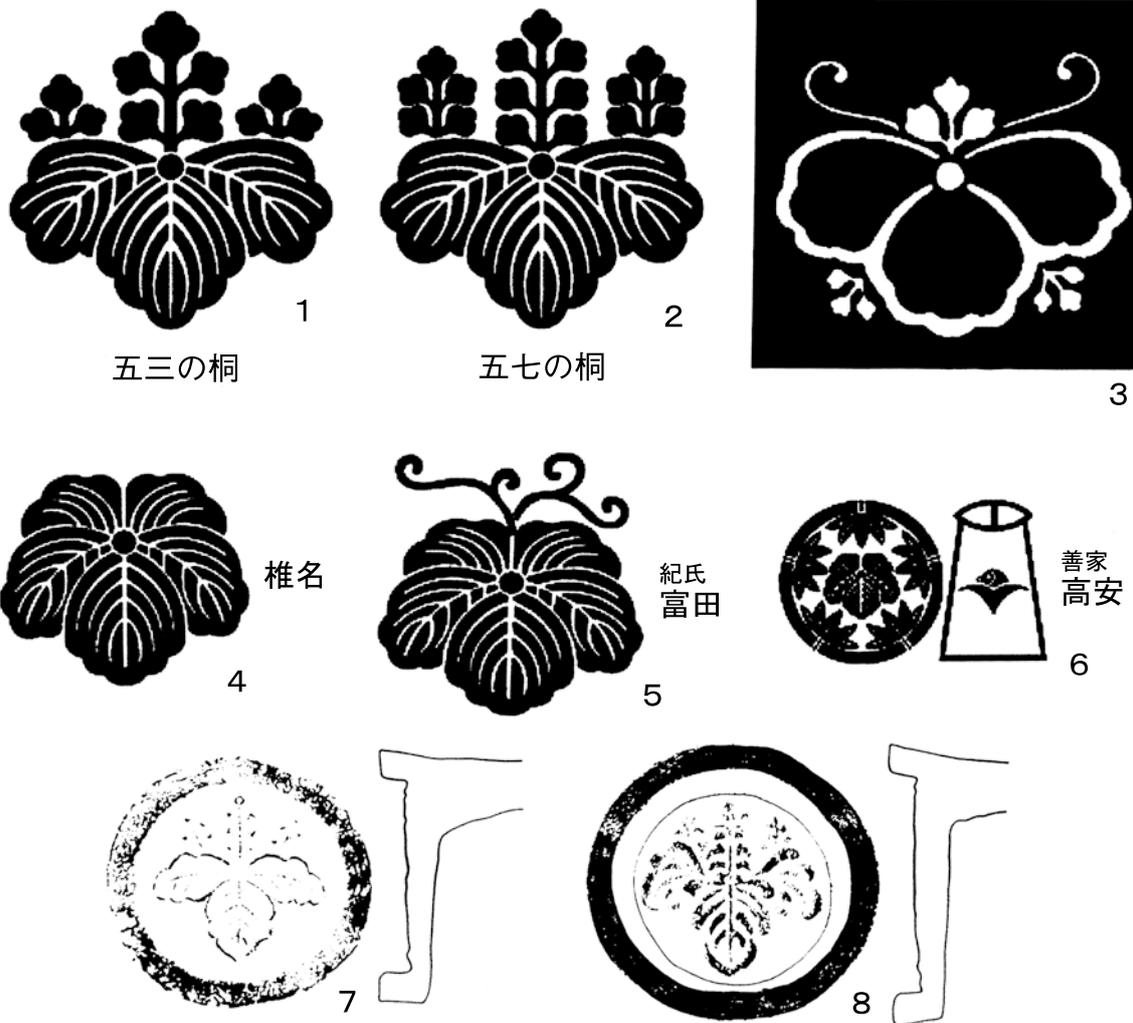
木戸雅寿氏は、「織豊期城郭にみられる桐紋瓦・菊紋瓦について」と題する論文で、「桐紋・菊
紋瓦出土一覧表」を作成しておられる。^(注6)筆者は「花のない桐文瓦」の分布状況を見るため氏の表
から普通の(花のある)桐文と菊文の瓦を抜いた表(表1・2)を作成した。これには黒田慶一氏の
論文「豊臣時代の桐紋瓦について」^(注7)に使用された資料も加え、萩城の資料も報告書から追加した。

このように筆者の表は、木戸氏の表と第1図から第12図に掲載された拓影を基礎にしているの
で、「出典」欄の数字は同氏の挿図の資料番号で、それ以外のものだけ「黒田第○図」のように
示した。そして表中の瓦の拓本を各氏の挿図から拝借して第1図、第4・5図に掲載した(縮尺
は不同らしい)。

表から直ちに判明することは、問題の文様はほとんど軒平瓦に限られるということである。「花
のない桐文」は、鳥衾を含めた軒丸瓦が2例(聚楽第城下織田信雄邸と萩城)、板状の飾り瓦が1
例(上記織田邸)だけである。少数ではあるが、このことは「桐文を描くには狭すぎるので瓦工が
桐文の省略形を瓦范に彫った」という解釈をはっきりと否定してくれる。木戸氏の一覧表には「花
のある桐文」の軒平瓦も多数あるからである。

試みに「三葉文」「五葉文」を分類すると、以下のようなになる。

A類 三葉の上に(背後に)左右対の小葉を付加するもので、この形は現行の「蔦文」そのもの
(第1図1～6)である。「五葉文」とも呼ぶ。木戸雅寿氏はこの五葉文をはっきりと蔦紋である



第3図 桐文・葛文参考図

1・2：桐文 3：桐胡蝶文 4～6：『見聞諸家紋』に見える「葛文」 7・8：相国寺創建瓦

と言いつけておられる(178頁)。とすればNM32と同文(同范)の萩城の鳥衾も当然葛文ということになる。

B類 五葉文で、A類に含まれるが、五葉文の上に内側に巻き込む唐草文の一对が加えられる。内膳町の軒丸瓦(1)と山口県・萩城の鳥衾(4)に表現されており、内膳町では「五葉の桐」、萩城では「桐胡蝶文」と報告されている。後者の場合、花の位置に表された一对の蔓状唐草を蝶の触角と見るわけである。現行の「中陰桐胡蝶文」(三葉、第3図3)に似ている。

C類 三葉の上部に小さく2、3本の枝状の線を表現するもの(第1図7～10、第2図6)。桐文の花房の軸(花梗)だけが痕跡として残ったものか。C類の小葉が退化したものか。

D類 「三葉文」。桐文から上半の花を取り去ったと見られる3枚の葉で、「桐葉文」とも呼ばれる(12～43)。軒平瓦の中心飾りとして多用され、葉は葉脈まで表現する写実的なもの(20・21・30など)から、輪郭だけ(40)、さらに3本の棒状・筋状になったもの(41)までである。

E類 「逆さ桐葉」。D類の三葉を上下逆転させたもので、D類と同様に軒平瓦の中心飾りとして、三葉の表現には、葉脈表現(44・45)、変形(52・53)、筐状(54～57)の各段階が見られる。

表1 蔦葉・桐葉文軒瓦一覧(1)

三葉文と対の小葉 (A類・B類)

No.	城郭等	城主	年代	瓦当文様	備考	出典
1	聚楽第城下	織田信雄	天正14～文禄4年	「蔦」葉・触角状唐草	軒丸瓦	11図-1
2	聚楽第城下	織田信雄	天正14～文禄4年	「蔦」葉・一転唐草文		11図-5
3	聚楽第城下	織田信雄	天正14～文禄4年	「蔦」葉・蔓状唐草	板瓦	11図-2
4	萩城	毛利輝元	慶長9年	「蔦」葉(桐胡蝶)文	鳥伏間瓦	萩城跡I-1207
5	平等院ほか	宇治市	江戸時代	「蔦」葉・二転唐草文		11図-3
6	平等院ほか	宇治市	江戸時代	「蔦」葉・二転唐草文		11図-4

三葉文と花梗 (C類)

No.	城郭等	城主	年代	瓦当文様	備考	出典
7	美作・篠茸城	宇喜多直家	天正5年	桐葉・四転唐草文		黒田第5図-3
8	淡路・妙京寺		天正6年	桐葉・四転唐草文		黒田第5図-4
9	備前・静円寺		天正7年	桐葉・四転唐草文		黒田第5図-5
10	大坂城	豊臣秀吉	天正12年?	桐葉・四転唐草文		黒田第5図-6
11	聚楽第城下	織田信雄	天正14～文禄4年	桐葉・一転唐草文		本稿第2図-5・6

三葉文または「桐葉文」(D類)

No.	城郭等	城主	年代	瓦当文様	備考	出典
12	会津若松城	蒲生氏郷	文禄元～2年	桐葉・三転唐草文		1
13	会津若松城	蒲生氏郷	文禄元～2年	桐葉・二転唐草文		2
14	沼田城	真田昌幸	天正14年～	桐葉・二転複唐草文		4
15	清州城城下	織田信雄	天正14～18年	桐葉・三転唐草文		17
16	聚楽日野殿町	諸大名	天正14～文禄4年	桐葉・一転唐草文		38
17	聚楽日野殿町	諸大名	天正14～文禄4年	桐葉・一転唐草文		39
18	聚楽第東堀	豊臣秀吉	天正14～文禄4年	桐葉・一転複唐草文	滴水瓦	40
19	聚楽第周辺	諸大名	天正14～文禄4年	桐葉・二転唐草文	滴水瓦	41
20	大和郡山城	豊臣秀長他	天正13～文禄4年～	桐葉・二転唐草文		110
21	大和郡山城	豊臣秀長他	天正13～文禄4年～	桐葉・三転唐草文		111
22	鳥取城	宮部・池田	天正8～慶長5年～	桐葉・二転唐草文		112
23	鳥取城	宮部・池田	天正8～慶長5年～	桐葉・二転唐草文		113
24	鳥取城	宮部・池田	天正8～慶長5年～	桐葉・二転唐草文		114
25	鹿野城	亀井茲矩	天正8～慶長14年～	桐葉・二転唐草文		115
26	松江城	堀尾吉晴	慶長17年～	桐葉・二転唐草文		123
27	米子城	吉川広家・中村一忠	天正19～慶長5年～	桐葉・三転唐草文		121
28	松江城	堀尾吉晴	慶長12～17年	桐葉・二転唐草文		123
29	金川城	浮田春家	～慶長5年	桐葉・四転唐草文		137
30	広島城	毛利輝元	天正17～慶長5年	桐葉・三転唐草文		139
31	高松城	生駒親正	天正16～慶長8年	桐葉・二転唐草文		140
32	福岡城	黒田長政	慶長5～元和9年	桐葉・二転唐草文		141
33	岩石城	熊井氏・毛利高頼	天正11～15年～	桐葉・二転唐草文		145
34	豊前松山城	黒田孝高	天正15年	桐葉・二転唐草文		147
35	豊前松山城	黒田孝高	天正15年	桐葉・二転唐草文		148
36	西大寺	奈良市	江戸時代	桐葉・二転唐草文		12図-4
37	法隆寺	奈良県斑鳩町	江戸時代	桐葉・二転唐草文		12図-5
38	朝光寺	兵庫県社町	不明	桐葉・二転唐草文		12図-6
39	摠見寺跡	滋賀県安土町	慶長9年	桐葉・二転唐草文		12図-9
40	小諸城	仙石秀政	慶長9～元和8年	桐葉・二連唐草文		12
41	大坂城・城下	豊臣氏他	天正11～慶長20年	桐葉・四転唐草文		77
42	萩城	毛利輝元	慶長9年	桐葉・唐草文		萩城跡II-1143
43	萩城	毛利輝元	慶長9年	桐葉・唐草文		萩城跡II-1144

表2 蔦葉・桐葉文軒瓦一覧(2)

「逆桐葉文」(E類)

No.	城郭等	城主	年代	瓦当文様	備考	出典
44	安岐城	熊谷直陳	文禄3年	逆桐葉・三転唐草文		149
45	安岐城	熊谷直陳	文禄3年	逆桐葉・三転唐草文		150
46	安岐城	熊谷直陳	文禄3年	逆桐葉・三転唐草文		151
47	安岐城	熊谷直陳	文禄3年	逆桐葉・三転唐草文		152
48	聚楽第東堀	豊臣秀吉	天正14～文禄4年	逆桐葉・二転唐草文		36
49	聚楽第東堀	豊臣秀吉	天正14～文禄4年	逆桐葉・一転唐草文		37
50	大坂城・城下	豊臣氏他	天正11～慶長20年	逆桐葉・三転唐草文		73
51	大坂城・城下	豊臣氏他	天正11～慶長20年	逆桐葉・三転唐草文		74
52	大坂城・城下	豊臣氏他	天正11～慶長20年	逆桐葉・二転唐草文		76
53	鷹取城	毛利鎮実・ 母里太兵衛	～天正14～慶長6年	逆桐葉・二転唐草文		144
54	聚楽第東堀	豊臣秀吉	天正14～文禄4年	逆桐葉・二転唐草文		35
55	大坂城・城下	豊臣氏他	天正11～慶長20年	逆桐葉・四転唐草文		78
56	大坂城・城下	豊臣氏他	天正11～慶長20年	逆桐葉・三転唐草文		79
57	大坂城・城下	豊臣氏他	天正11～慶長20年	逆桐葉・五転唐草文		80

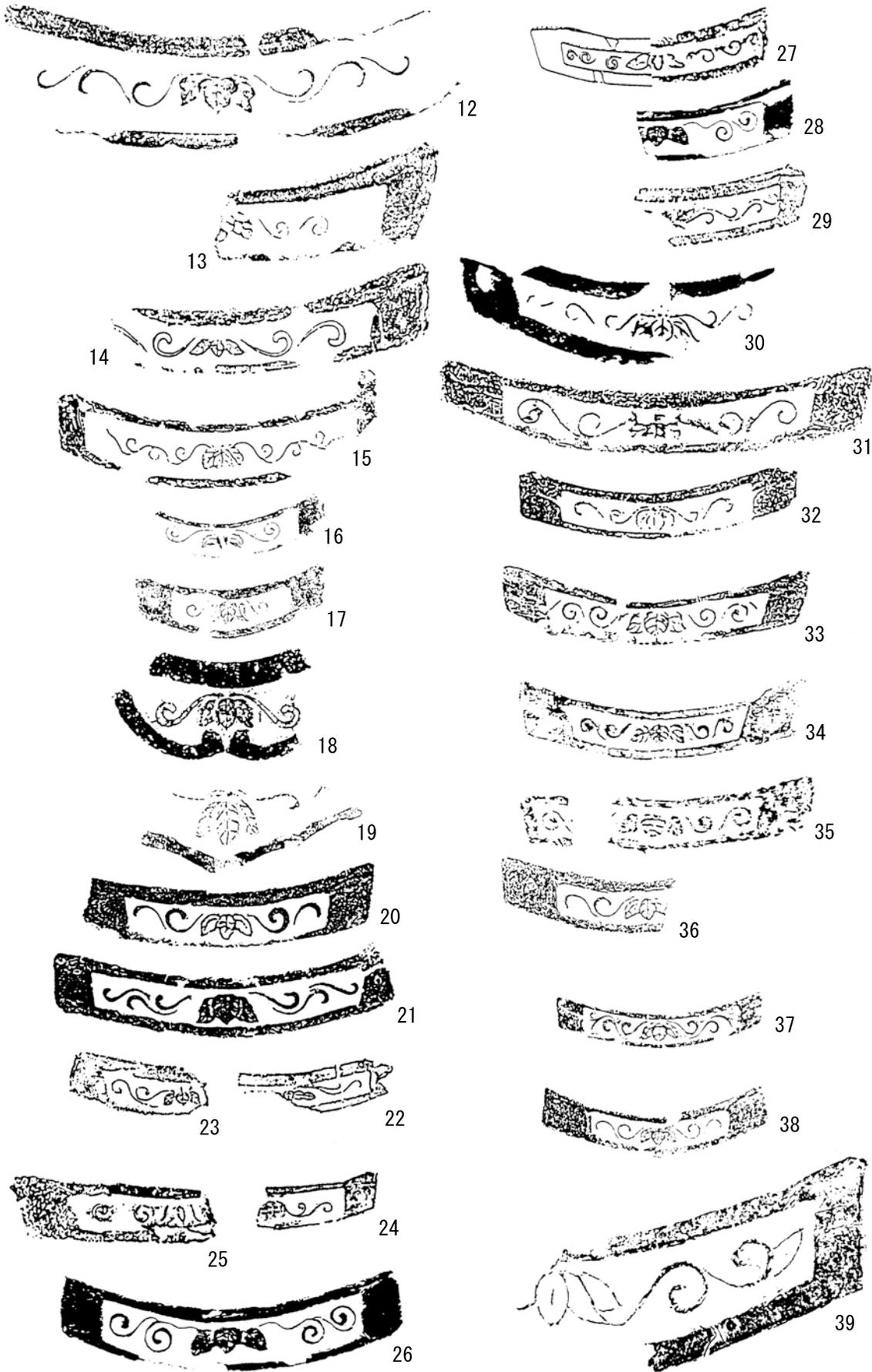
黒田慶一氏は「筒状花のないものは桐ではない」とされるので、A～E類はすべて非桐文となる。また木戸雅寿氏は「桐文は葉の数が三葉、蔦文は葉の数が五葉」という認識なので、A類・B類は「蔦文」、D類は「桐葉文」、E類は「逆桐葉文」として論を進めておられる。

5類の中で家紋として現代に残っているのは、A類の「蔦」とB類の「桐胡蝶」である。C類は中途半端な、多分過渡的なもので、現代には残っていない。E類の逆さ桐葉文は3葉が上向きに延びるもので、桐の葉としては不自然である。葉脈まで描いたものもあるので、本来3葉であったのであろうが、笹葉状、さらに3本の棒状になると、桐葉という認識があったのか、疑わしくなる。寡聞にして「逆さ桐葉」という家紋は知らない。問題はD類の「三葉文」である。蔦から小葉を外した三葉、あるいは桐から花を取った三葉は、現行の家紋にはないようである。しかし、以前もなかったのか、400年前に瓦だけに現れたものなのか、資料は少ないが、もう少し調べてみよう。

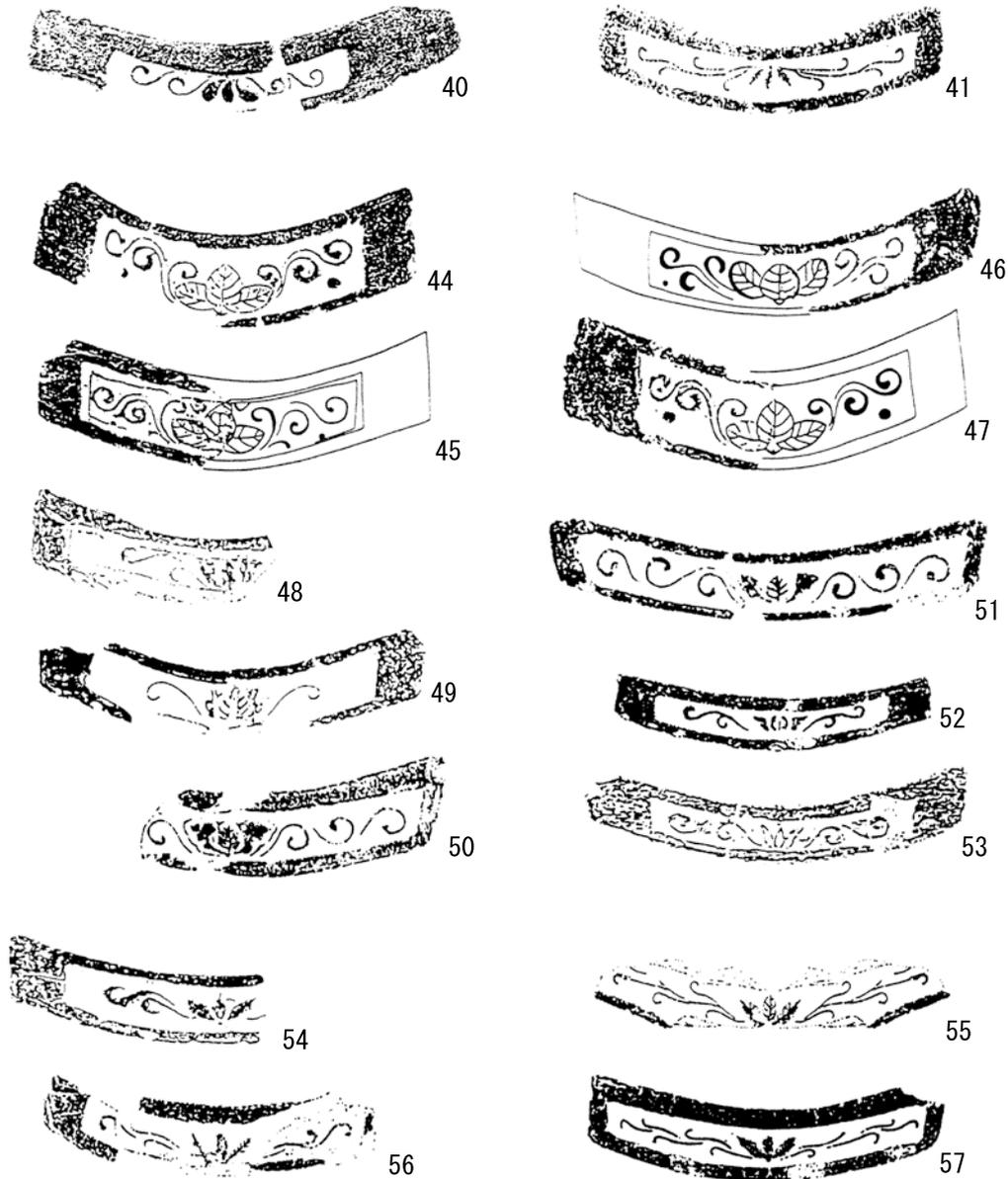
4. 桐文の歩みと蔦文の誕生

桐紋は、元々天皇家の紋で、臣下に下賜されたのは、後醍醐天皇が足利高氏に「尊」の字と同時に桐紋を与えたのが最初という。先に触れたように足利家の家紋として、義満が建立した相国寺旧境内から桐文軒丸瓦(第3図7・8)が再三出土している。その後も織田信長や豊臣秀吉など国の宰相クラスの紋として下賜され、現在の日本政府の紋として使われているのは周知のとおりである。

一方、花の替わりに対の小葉をつけた場合そっくりになる蔦文は、永正7(1510)年の『見聞諸家紋』では椎名、富田、高安氏の家紋(第3図4～6)に使われている。さらに戦国時代の松永久秀や藤堂高虎の家紋として知られている。江戸時代になると、多くの松平姓、特に大給松平氏おぎゅうまつだいらの



第4図 桐葉文瓦(2)



第5図 桐葉文瓦(3)

一族が多く鳶文を家紋にしている。その後8代将軍吉宗がこの紋を好み、庶民にまで広がったという。

「花のない三葉文」が本来は桐文とする論者は、「花はお返しした」という。^(注8) 尊氏や義満、信長や秀吉はそのまま花のある桐紋を使う。しかし、足利将軍家はさらに同族でもある陪臣に下賜した。永正7(1510)年の『見聞諸家紋』には桐紋を持つ氏として、吉良・渋川・石橋・斯波・細川・畠山・上野・一色・山名・新田・大館・仁木・今川・桃井・吉見の15氏が挙げられている。これは足利一門のほぼ全てであり、守護大名クラスのこれら諸家からその家来へと桐紋の家はネズミ算的に増えていったであろう。しかしこの時、ある種の歯止めがかかったらしく、大名の家来クラスでは、元は天皇家の紋とはあまりに恐れ多いということで、花については辞退し、桐の葉だけを頂戴して家紋としたらしい、というのである。

とすれば、花のない桐文は、家紋としてある時期確実に存在したはずである。これが考古学でいう「桐葉文」であろう。それがいつの間にか「蔦紋」と呼ばれるようになったらしい。形の類似から「桐葉」が「蔦」に同化されてしまったのである。上方に小葉一対や花梗を付加したのも、この桐葉文のバリエーションであったろう。そして、名前が「蔦」となるにつれて、バリエーションもなくなり、すべて「五葉の蔦」に統一されたのであろう。^(註9)

また、徳川氏の多くの旗本や御家人には「葵」を憚って形の似た「片喰」に替えた家があったように、「桐」の代わりに「蔦」とした大給松平家のような家も多かったという。これも元は「桐」という由緒に依るのであろう。しかし、それでも幕末には大名・旗本の五分の一の家が桐紋をそのまま使用していたという。

それにしても蔦紋の蔦の図像は奇妙である。朝顔や葡萄と同じく切込みが入った1枚の葉であるのに3枚に見える。これを三葉文とか五葉文と言った時点で「蔦」であることを否定してしまう。最初から蔦の葉を描いたようには見えない。瓦当文様の場合、浮彫であるから内膳町例も萩城例も3枚の葉が重なっているようにしか見えない。実際の蔦の葉を見て図化すれば、もっと違った表現になっていたように思われる。もっと葉は小さく尖り、おそらく複数枚で蔦の葉を表現したであろう。さらにその蔦の葉の背後の小葉は何であろう。もし本来桐であれば、花は年中咲いている訳ではなく、成長の速い桐の木であるから3枚重なった大きな葉の背後には、常に若い小葉が見えているはずである。このように今日の「蔦文」は、はじめから蔦の葉を描いたとは思えない。3枚の桐の葉が1枚の蔦の葉に似ていたに過ぎない。

想像するに、足利尊氏が桐文を賜った時、一門の守護大名クラスは兎も角、家来の家来といったあたりでは、遠慮して花を返上した。そして葉だけの桐葉文を家紋とした。この花をなくした「桐」が途中から「蔦」とよばれたのではないであろうか。

5. 織田信雄邸と萩城の桐胡蝶文瓦

最後に「桐胡蝶文」を考えてみよう。聚楽城下内膳町織田信雄邸の軒丸瓦は桐胡蝶文かも知れない。織田信雄は織田一族の中で最後まで秀吉の軍門に下ることを潔しとはしなかった。当然、織田氏としての誇りは持っていたであろう。この遺跡からは金箔押し胡蝶文飾り瓦が出土している。胡蝶を横から見た桓武平氏以来の胡蝶文である。信長時代の織田氏は出自を桓武平氏としていた。従って、織田邸に胡蝶文の瓦が使われるのは当然とも言える。そしてこの軒丸瓦では胡蝶は桐に隠されている。織田信長は永禄11(1568)年に足利將軍義昭から桐紋を貰っている。秀吉の天正14(1586)年より18年も早い。桐紋から花を外して恭順の意を示し、触角を加えて胡蝶にし、桓武平氏の誇りを表現したとも考えられる。

萩城の鳥衾の場合は、たまたま出入りの瓦職人が内膳町と同文(同范?)の瓦范を持っていたというのでないとすれば、萩城での存在の説明は難しい。毛利氏と胡蝶が結びつかないからである。しかし桐紋に関しては、毛利氏への桐紋の下賜は永禄3(1560)年と考えられる。桶狭間の年である。織田や豊臣よりはるかに早く、毛利元就は正親町天皇から桐紋を下賜されている。堂々と桐

文が使えたはずであるが、やはり関ヶ原で敗れ、領地も大きく削られ、長州に引っ込んで、その居城として築城したのが慶長9(1604)年の萩城であったことで、桐が胡蝶に隠れ、胡蝶に桐が潜むような文様が選ばれたのであろうか。

6. 結語めいた見直し

筆者は、A～E類は、相国寺創建瓦の「四七の桐」「十一六の桐」(第5図)から、現行の「桐文」「葛文」への過渡期に現れた桐文の変形であると見ている。A類は「桐葉文」の一種であったが「葛紋」と呼ばれるようになった。B類は最終的に現在の「桐胡蝶紋」として残っている。C類は消え、D類の「桐葉文」はC類の「葛文」に同化された。また、E類はおそらく古代の軒平瓦の中心飾りに似ていたので、瓦文様としてだけ存在し、家紋ではなかった。要するに本来すべて桐であったものが、様々な理由で葛になり、蝶になったのではないであろうか。

(こやま・まさと＝当調査研究センター調査課企画調整係副主査)

注1 平良泰久ほか「平安京跡(左京内膳町)昭和54年度発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1980-3)』京都府教育委員会)1980 230～257頁

注2 谷口哲一ほか『萩城跡(外堀地区)』I(『山口県埋蔵文化財センター調査報告第27集』、財団法人山口県教育財団山口県埋蔵文化財センター)2002 162頁 第150図1207 図版111

注3 森島康雄「聚楽第と城下町の瓦」(『織豊城郭』創刊号 織豊期城郭研究会)1994

注4 松藤和人ほか『同志社中学校校体育館建設予定地発掘調査概要』同志社大学校地学術調査委員会)1977 64頁 第22図10・11 図版13

上村和直ほか『相国寺旧境内・上京遺跡発掘調査報告書』同志社大学歴史資料館・(公財)京都市埋蔵文化財研究所)2013 72頁 図252-10 写真図版18

注5 黒田慶一「豊臣時代の桐紋瓦について」(『織豊城郭』第2号 織豊期城郭研究会)1995 191・193頁

注6 木戸雅寿「織豊期城郭にみられる桐紋瓦・菊紋瓦について」(『織豊城郭』第2号 織豊期城郭研究会)1995 160頁(第1表)

注7 注5文献 第5図

注8 この説の出所ははっきりしない。家紋関係書やインターネットのブログやホームページに散見するが、いずれも執筆者自ら伝聞、あるいは推定と断っている。

注9 桐葉文という記憶は必ずしも消え去ってはいない。個人的なことであるが、旧丹波国何鹿郡八田郷の筆者の実家の家紋は「丸に葛」である。ところが、昔からそれを「葉桐(はぎり)」と伝えて来た。若い頃から誤伝であろうと思っていたが、先祖が仁木氏と関係があったらしいということや、内膳町の瓦について考える機会があり、本稿のような考えに至った。表題の「花のない桐文」は、結論の先取りである。

しもみずし 1. 下水主遺跡第 1・4・5 次 (A・B・C 地区)

所在地 城陽市水主倉貝・宮馬場

調査期間 平成24年5月21日～平成26年6月13日

調査面積 3,520㎡(3か年の調査面積の合計)

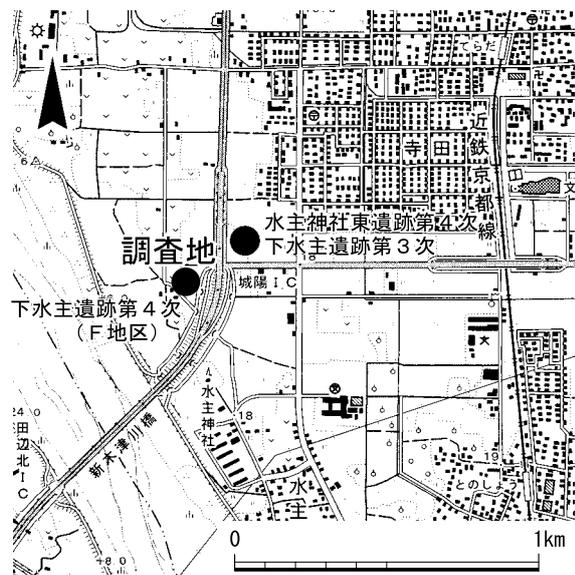
はじめに この発掘調査は新名神高速道路整備事業に伴い、西日本高速道路株式会社の依頼を受けて実施したものである。下水主遺跡は、城陽市南西部に位置し、木津川によって形成された微高地やその後背湿地に立地している。遺跡の規模は、南北約980m、東西約540mの範囲に広がり、縄文時代から江戸時代に至る複合遺跡である。調査は平成24年度から開始したが、他の調査区を優先して実施したため、対象地区の調査は足掛け3か年におよんだ。

調査概要 この調査では、A・B・Cの各調査区を設定して調査を実施した。調査では、中世の島畑のほか、弥生時代から飛鳥時代にかけての遺構や遺物を検出した。

①弥生時代 中期の土坑2基や溝1条などのほか、自然の流路1条を検出した。溝はB・C地区にまたがって検出したもので、総延長53mである。また、自然流路は後述する古墳時代の溝SD22にはほぼ重なって検出した。遺物は、各遺構から少量ずつ出土したほか、後世の遺物包含層や遺構からも弥生時代中期の土器が出土している。

②古墳時代 前期の大規模な溝1条(SD22)と、ほぼ同時期の小規模な溝2条などを検出した。溝SD22は、上述の弥生時代中期の自然の流路が埋没した後、掘り直したもので、おおむね東南東から西北西に向かって流れる。溝の規模は、検出長33m、幅10～11m、溝底の幅4～5m、深さ約2mである。SD22の南岸で大規模な護岸施設を確認した。長さ2m内外、直径5～10cmの丸太材を積み上げて護岸としたもので、護岸の下部には直径30cmを超える大型の伐採木を基礎として使用している。また、部分的に敷葉工法(葉の付いた木の枝と土を交互に積み上げていき、堤などを構築する方法)を用いていたことも確認した。

溝の下層埋土では、庄内式から布留式にかけての土師器が多数出土するとともに、丸太材や木製品なども大量に出土した。これらの丸太材の多くは、SD22の南岸に設けられた



第1図 調査地位置図(国土地理院 1/25,000 宇治)



下水主遺跡B地区溝S D22全景(東から)

護岸施設の一部が破損して流失したものであると考えられる。また、木製品としては、櫂や鋤・鍬・盤などの実用品やその未成品、陽物形や船形木製品などの祭祀遺物が出土した。

S D22は、徐々に埋没していたが、中期末頃に再度掘削されていることが判明した。この再掘削時には護岸等の施設は認められず、少量の須恵器や子持

ち勾玉などが出土した。その後、古墳時代後期にかけて埋没し、飛鳥時代には完全に埋没してしまっただようである。

③飛鳥時代 井戸1基、土坑3基、溝3条、柱穴300基以上を検出した。井戸S E112は一辺2.5m程度の方形掘形を持ち、残存する深さは1.6mである。井戸内には建築部材等を転用した井戸枠が方形に組まれていた。井戸の最下層から土師器甕7点と須恵器平瓶1点が出土した。井戸の廃棄に伴って投棄された可能性がある。柱穴群は建物として復元できなかったが、直線上に並ぶ柱穴列から、主軸を北に対して約40°西に振った柵列や掘立柱建物の存在が想定できる。

④中世 3地区合わせて7基の島畑を検出した。島畑は、南北方向に主軸を持つものが配置されており、ほぼ同じ位置で近世にも引き続き営まれていた。

まとめ

①弥生時代中期の遺構・遺物を確認することができた。これらの遺構・遺物は昨年度調査を実施した第4次調査F地区に向かって広がる微高地上に営まれたものと思われる。

②古墳時代の遺構として検出した溝S D22は、護岸施設が認められたことや大規模な溝であることなどから、船の出入りが想定でき、物資の運搬等に利用されたものと考えられる。また、護岸施設の存在から、これを維持・管理した集団の存在が想定されるが、これについては調査地の東方に造営された梅ノ子塚1号墳などの被葬者がこの溝を掌握していた可能性がある。ただ、周辺では竪穴建物など、集落の存在を示すような遺構は未検出で、関連する集落については今後の検討課題である。

③飛鳥時代の遺構・遺物を多数検出したものの、その性格は明らかにできなかった。近隣には式内社の水主神社が存在することから、これと関わる集落の存在等が予想される。

④これまでの調査と同様に中世以降の島畑を検出した。現在、80基を超える島畑を確認しており、中・近世における当該地域の土地利用の一端を明らかにすることができた。

(筒井崇史)

おおかわ 2.大川遺跡第 5 次

所在地 京都府舞鶴市字大川

調査期間 平成26年 4月10日～平成27年 1月29日

調査面積 6,510㎡

はじめに 今回の発掘調査は、由良川下流部緊急水防災対策事業に関わる堤防工事に伴い、国土交通省福知山河川国道事務所の依頼を受けて実施した。調査地は、河口から約8.5km遡った由良川左岸に位置する。調査地西側山裾には式内社である大川神社が所在する。これまでの調査で、弥生時代から室町時代の遺構・遺物が確認され、大規模な複合遺跡であることが確認されている。

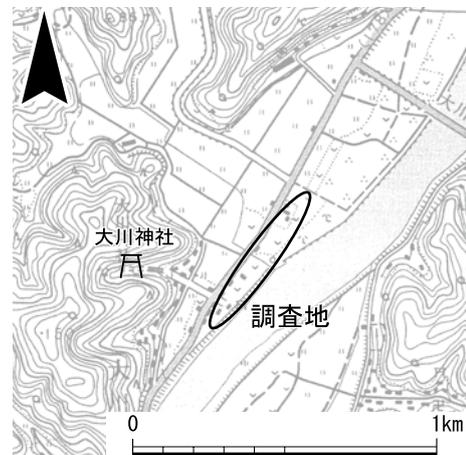
調査概要 今回の調査は築堤範囲内に北側から南側にかけてA～Cの3地区を設定して行った。各地区をそれぞれ3分割した。今年度はA2地区、A3地区、B2地区、B3地区、C2地区、C3地区の調査を実施した。

A2地区 A2地区はもっとも北端部(由良川最下流部)にある地区である。第1面は室町時代で、少数のピットを検出した。第2面は北部で平安時代後期の炉3基以上、掘立柱建物4棟、土坑多数を検出した。炉は建物の中にあり、鍛冶炉として使用された。出土遺物は土師器皿、黒色土器椀、鉄製品をはじめ、中国製白磁椀・皿、青白磁花形杯などである。また、石帯1点も出土している。第3面は遺構はなく、単独で須恵器特殊扁壺・壺や完形の須恵器提瓶が出土した。

A3地区 A3地区はA2地区の南に連続する地区である。第1面は室町時代で、南部で掘立柱建物1棟を検出した。第2面は北部で平安時代後期の掘立柱建物2棟、土坑多数を検出した。柱穴の中には土師器皿・黒色土器椀のほか、中国製白磁椀と青磁椀などもある。A2地区の遺構群とはほぼ同じく平安時代にほぼ収まる。第3面は古墳時代から奈良時代にかけての遺構面である。不定形の土坑が1か所のみ確認され、その中に多数の土師器甕が埋められていた。

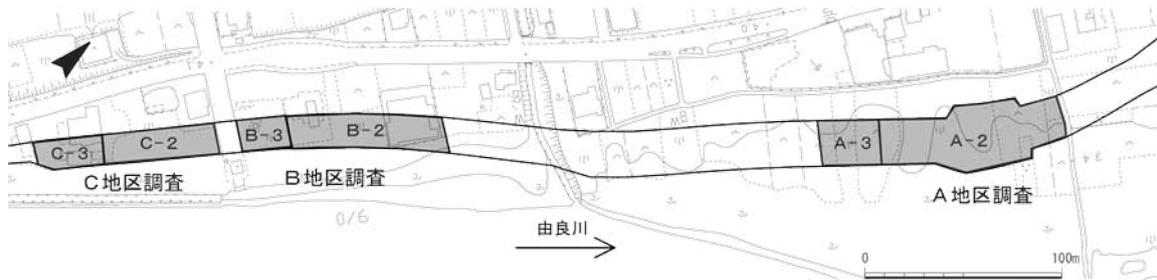
B2地区 B2地区は調査地の中央部に位置する。今年度は第3面を調査した。その結果、弥生時代中期の竪穴建物1棟、同後期の竪穴建物6棟を確認した。後期の1基が隅丸方形であるが、その他は円形である。さらに、中期の方形周溝墓1基を確認した。古墳時代の遺構としては、前期の土器のほか勾玉1点が出土した土坑や後期の方形竪穴建物5基を確認した。古墳時代の遺構は北側に集中しており、弥生時代の方形周溝墓は南部にある。なお、飛鳥時代の掘立柱建物3棟も検出した。

B3地区 B3地区は、B2地区の南部に連続する地区である。第1面は室町時代で、多数のピットを検出した。



第1図 調査地位置図

(国土地理院 1/25,000 西舞鶴)



第2図 トレンチ配置図(1/4,000)

第2面は平安時代後期から鎌倉時代で、掘立柱建物1棟、柵列、土坑多数を検出した。第3面は飛鳥から奈良時代で少数のピットを検出した。第4面は弥生時代中期から古墳時代後期である。弥生時代中期の方形周溝墓1基を確認した。また、後期の方形竪穴建物1棟、時期不明の方形竪穴建物1棟を確認した。さらに、古墳時代前期の方形竪穴建物2棟、中期の方形竪穴建物1棟を確認した。この建物が廃絶した後も多量の土器が廃棄されており、土師器高杯・甕のほか中期の須恵器高杯も出土した。

C2地区 C2地区は大川神社の御旅所である野々宮神社参道の南側に位置する。第1面は室町時代である。ピットを多数検出した第2面は平安時代後期から鎌倉時代である。中央部で宋銭を主体とする銭貨が20枚以上出土した。A地区やB地区では2～3枚程度しか出土しないが、もっとも南端に位置する前年度調査したC1地区では約50枚以上が出土しており、C地区での出土が多いことが特徴である。第3面は飛鳥から奈良時代で少数のピットを検出した。第4面は弥生時代中期から古墳時代後期である。方形竪穴建物1棟を確認した。ここでは炭化した柱材が竪穴内に埋没しており、焼失したことがわかる。

C3地区 C3地区はC2地区の南部に連続する地区である。第1面は室町時代である。根石をもつ柵列3条を確認した。第2面は平安時代後期から鎌倉時代である。井戸2基を確認した。

まとめ 今回の調査の成果は以下のとおりである。A地区で平安時代後期の鍛冶工房跡を2か所確認した。昨年度も1か所確認しており、A地区一帯が平安時代後期から鎌倉時代初期にかけて鍛冶工房があったことが判明した。B地区では、さらに、弥生時代中期末から後期にかけて、つづいて古墳時代前期にも建物や土坑が存在しており、この時期も集落が存在したことが判明した。なお、方形周溝墓もあることから、集落のある場所が一時期、墓地に変容したことも判明した。平安時代後期から鎌倉時代にかけての建物跡を確認したので、ここで、集落が営まれていたことが判明した。C地区は平安時代後期から鎌倉時代の建物とともに井戸があることから、屋敷の一面が確認された。室町時代の遺物も多く、他の地区と違ってやや新しい時代まで存続していたようである。また、宋銭をはじめとする銭貨が約100枚出土していることは、この周辺で貨幣を使用した商業活動が盛んであったことを示している。

古墳時代の遺構はC2地区で確認したものの、調査地の南端であるC1地区では湿地であり、集落外となっている。弥生時代の遺構はなく、B地区が南端であったようである。(伊野近富)

いづも 3.出雲遺跡第18次

所在地 亀岡市千歳町千歳地内

調査期間 平成26年5月19日～7月10日

調査面積 400㎡

はじめに 今回の調査は、農山漁村活性化プロジェクト支援交付金千歳地区の整備事業として、道路建設に先立って実施した。

出雲遺跡は、亀岡盆地東部の御影山の麓、丹波国一宮である出雲大神宮が所在する段丘上に位置している。集落遺跡として東西0.5km、南北約1.7kmの範囲を有する。これまでの調査で古墳時代前期から中期の竪穴建物や平安時代末の掘立柱建物などが検出されている。さらに調査地西側には丹波地方最大の前方後円墳である千歳車塚古墳があり、石製腕飾が出土した出雲武式古墳がかつて存在していた。

今回の調査地は、平安時代末の土器が大量に出土した溝や、古墳時代の竪穴建物などを検出した昨年度の調査トレンチの南東部に隣接している。道路建設予定範囲に細長い調査トレンチを設定した。

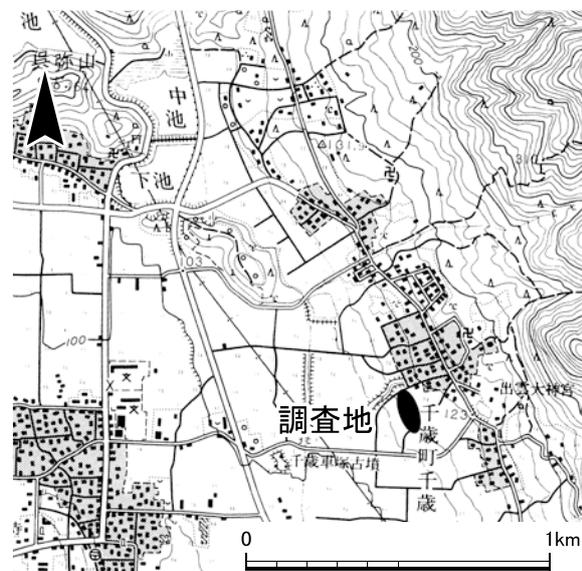
調査概要 調査地周辺の土地利用は、かつての階段状に造られた棚田から、現在は整備された農地となっている。今回の調査地の北西端は段丘上にあるため、比較的浅いところで遺構面を確認し、昨年度トレンチから続く面で古墳時代中期の竪穴建物1棟を検出した。

さらに、南東に向かって谷部の傾斜がはじまり、南東端では国営農地整備における盛土が2m以上と厚く堆積していた。こうしたなかで、農地整備で削平を免れたトレンチの中央部において、平安時代から中世の柱穴を20基以上を検出することができた。

古墳時代中期の竪穴建物は、調査地外にひろがるため、約4.5mを測る一辺のみの検出である。深さは約15cmであった。埋土から土師器甕の破片が出土している。

平安時代から中世の柱穴は、直径0.2～0.4m、深さ0.15～0.25mを測る。平安時代から中世の土器は遺構検出面に達する上位の包含層からも大量に出土し、かつ流転による磨滅が顕著にみられないことから、近隣に当該期の集落の広がりを想起させる調査例となった。

(黒坪一樹)



調査地位置図 (国土地理院 1/25,000 亀岡)

4. ほうじょうじ てらまちきゅういき 法成寺跡・寺町旧域

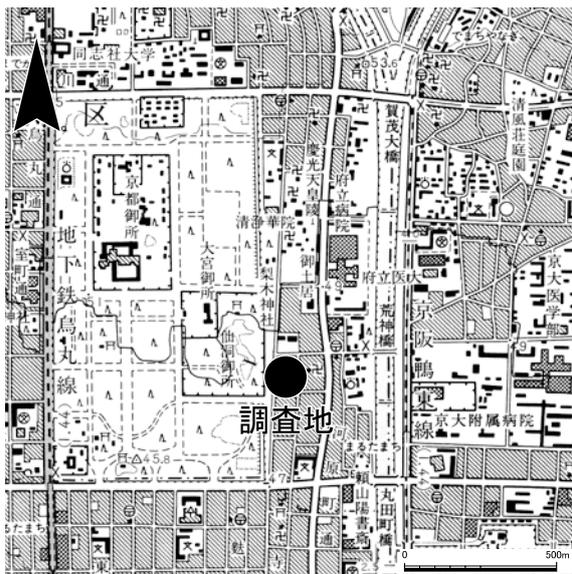
所在地 京都市上京区寺町荒神口下ル松陰町131他

調査期間 平成26年6月9日～9月3日

調査面積 830㎡

はじめに 今回の調査は、府立鴨沂高等学校改築等工事に伴って実施した。調査地は、寺町通を挟んで京都御苑の東辺に隣接する地点で、仙洞御所の東側にあたる。この地点は、藤原道長が寛仁4(1020)年に創建した法成寺の境内に含まれると想定されている。また、豊臣秀吉が天正年間(1573～1593年)に京の街中にあった寺院を移転させた寺町の範囲内に位置する。江戸時代初期に描かれた「洛中絵図」(1637年)では、鴨沂高校の敷地内には革堂行願寺と専念寺という寺院があったとされる。その後、宝永5(1708)年の大火で焼失している。

調査概要 調査は、鴨沂高校の南北2か所の中庭部分に調査区を設けて実施した。南北両調査



第1図 調査地位置図

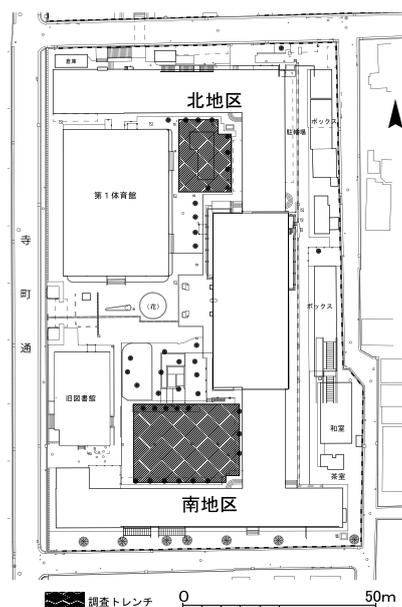
(国土地理院 1/25,000 京都東北部)



写真1 北地区土坑(南東から)

区では主に近世前半期の遺構を検出した。寺町関連および宝永5(1708)年の大火後の遺構とみられる。

北地区は、上記絵図によると、革堂行願寺の境内にあたると考えられる。この調査区では現地表下1.2m前後の寺町期の整地層上から、ほぼ南北方向に延びる幅1.5m、深さ0.7mの溝や宝永の大火で焼失した寺院の瓦を大量に投棄し



第2図 調査区位置図(1/2,000)



写真 2 北地区溝(北から)



写真 3 南地区礎石建物(西から)



写真 4 南地区土坑(東から)



写真 5 南地区土坑(東から)

たとみられる土坑などを検出した。また、宝永の大火後の整地層とみられる焼土を含む層の上から柱穴を検出している。

南地区は、上記絵図によると専念寺の境内にあたると考えられる。この調査区では、宝永の大火後の整地層と考えられる焼土を含む層の下から、南北 2 間以上、東西 4 間以上の礎石建物や石積土坑などを検出した。また、宝永の大火後に焼けた瓦を投棄したとみられる土坑や柵もしくは塀跡と考えられる柱穴列、平瓦片を列状に埋め込んだ不明遺構なども検出した。礎石建物については、礎石と根石の間に焼土を含むものがあり、宝永の大火後の遺構の可能性もある。

南北両調査区とも寺町期の整地層以下 1.5～1.8m は、鴨川の河川堆積による礫層が続いており、確実な遺構面は確認できなかった。ただ、この礫層中には、やや磨滅した平安時代の瓦や室町時代の土師器皿片などが含まれており、法成寺に使用されたと考えられる緑釉瓦片もわずかに含まれる。

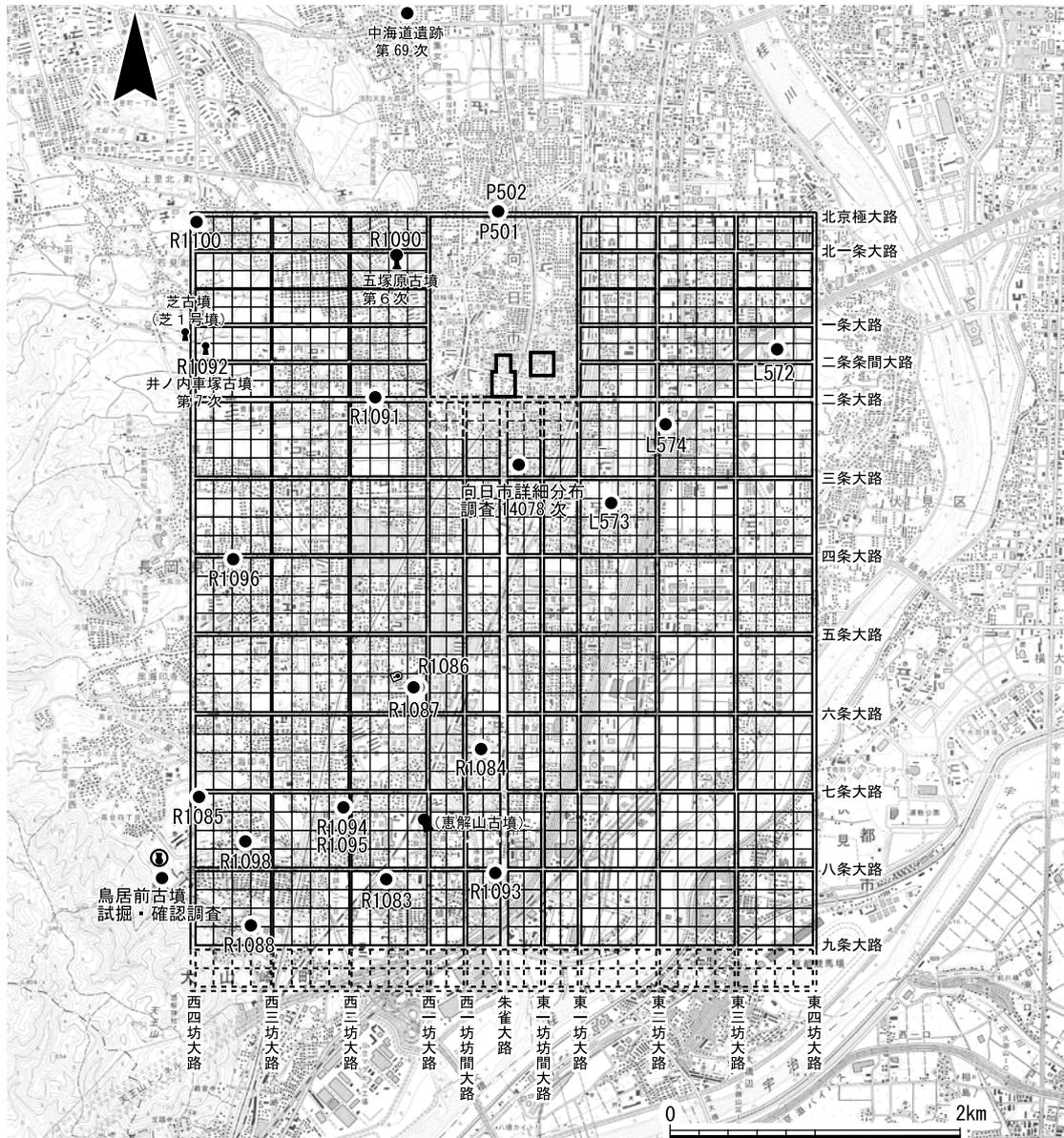
まとめ 今回の調査では、法成寺に関連する遺構は検出できなかった。平安時代には、今回の調査地は鴨川の河道もしくは河川敷と考えられ、法成寺の範囲が調査地には及んでいなかった可能性が高い。京都府教育委員会が荒神口通をはさんだ北側の鴨沂高校グラウンドで実施した立会調査では、現地表下 2.5m 付近で、法成寺に使用された緑釉半裁宝相華文軒平瓦を含む多数の瓦が出土している。法成寺は荒神口通より北側にあったと予想される。寺町関連の遺構については、比較的良好に残存していることを確認した。調査例が少なく、実態が良く分からなかった中世末から近世初頭頃の寺町の様子を知る手掛かりとなる調査と言えよう。(引原茂治)

長岡京跡調査だより・121

長岡京跡発掘調査の情報交換および資料の共有化を図り、長岡京跡の統一的な研究に寄与することを目的として、毎月1回、長岡京域で発掘調査に携わる機関が集まり長岡京連絡協議会を実施している。平成26年6月から10月の例会では、宮域2件、左京域2件、右京域16件、京域外3件の合計23件の調査報告があった。その中で、主要な事例について報告する。

宮域 第501・502次調査(向日市寺戸町)では、攪乱のため北京極大路は確認できなかったが、長岡京期の町内の排水用暗渠溝と弥生～古墳時代前期の土器が出土する流路が検出された。

左京域 第572次調査(京都市伏見区西出町)では、幅2mを図る東四坊坊間小路の西側溝を確



調査地位置図 (1/50,000)

(向日市文化財事務所・(公財)向日市埋蔵文化財センター作成の長岡京条坊復原図を基に作図)
調査地はPが宮域、Rが右京域、Lが左京域を示し、数字は次数を示す。

認め、外区に鋸齒文をもつ軒丸瓦や土器類がまとまって出土した。また、下層から古墳時代の流路が見つかった。第573次調査(向日市上植野)では、奈良～長岡京期の遺物を包含する流路を確認した。第574次調査(向日市鶏冠井町)では三条条間北小路の南北両側溝を検出し、深く幅広い北側溝の内部から鬼瓦も出土した。条坊施工に伴い基幹排水路としても機能したものと考えられる。また、長岡京期の土器類が廃棄された土坑も検出された。向日市詳細分布調査第14078次(向日市上植野)では、郭を限る堀が確認されていた中世の上野秋田館の内部で礎石を残す柱穴を検出し、14～16世紀の土器が出土する溝が確認された。併せて凝灰岩切石の破片が出土した。

右京域 第1083次調査(長岡京市調子)では、瓦器が出土する東西溝数条、小柱穴の検出とともに、チャート製石鎌・サヌカイト剥片が出土した。細川藤孝による勝龍寺城本丸の北東に鎮座する神足神社境内に現存する空堀と土塁について、第1084次調査(長岡京市東神足)として調査が実施された。その結果、土塁の下部で東西向きの先行する箱堀が存在し、鎌倉～南北朝期の神足城の空堀であることが判明した。第1086・1087次調査(長岡京市神足)では、六条条間南小路の北側溝と、長岡京期の木組み井戸や掘立柱建物、溝が検出された。隅柱横棧縦板組の井戸からは土器とともに重弧文軒平瓦や凝灰岩片が出土した。五塚原古墳第6次調査にあたる第1090次調査(向日市寺戸町)では、立命館大学(5次)と向日市埋蔵文化財センター(6次)による墳丘部の調査が実施された。第6次調査では、撥形を呈する前方部の前端の広がり予想よりも狭く細長い平面形が判明し、後円部の段築と整合性のない段築がめぐることにもわかった。墳丘下部には古墳造営に先立つ水平面を確保する目的の盛土があり、礫敷を設け、墳丘基盤としている。第1091次調査(長岡京市今里)では二条大路の南側溝と平行する町内溝が検出された。側溝は幅が3mと規模が大きく、内水の排水機能もかねて施工されたものと考えられる。井ノ内車塚古墳第7次にあたる第1092次(長岡京市井ノ内)では、南北に主軸を置く墳丘の西側において、前方部最大径からくびれ部にかけて取り付く造出部が確認され、周囲から家・人物(巫女)・動物(犬)・石見型などの形象埴輪、円筒埴輪(古墳時代後期)が出土した。弥生時代の中核的集落として知られた長法寺遺跡内の第1096次調査(長岡京市長法寺)では、集落を囲む弥生時代後期の環濠を2条、同時期の甕棺墓を1基、そして、当遺跡では初見となる埴輪棺(古墳時代中期前半)が検出された。昨年度、埴輪列・葺石をもつ古墳として確認された堂上古墳(第1100次調査・京都市西京区大原野)では、周溝をめぐる一辺約28mの墳丘規模の方墳の可能性が指摘された。出土埴輪から古墳時代中期初頭の築造が考えられる。

京域外 14基の古墳で構成される芝古墳群の中で唯一前方後円墳として知られる芝1号墳(京都市西京区大原野)の墳丘の発掘調査が初めて実施された。墳丘盛土の構築技法の一端が判明するとともに、後円部内部主体から延びる石囲い排水暗渠溝が検出された。周溝の埋土から円筒埴輪(後期)が出土し、6世紀初頭の築造が想定された。古墳時代初頭の豪族居館(神殿)遺構が検出されていた中海道遺跡では、そのすぐ東側隣接地で調査が実施された(第69次調査・向日市物集女町)。小字鳥居前における試掘(大山崎町字円明寺)では、鳥居前古墳の立地する南側丘陵斜面地において試掘調査が実施され、古墳の南側で埴輪と葺石が転落した状態で出土した。(伊賀高弘)

普及啓発事業（平成26年 8月～11月）

当調査研究センターでは、埋蔵文化財発掘調査の成果を広く府民の皆様へ報告し、地域の歴史を理解していただくため、埋蔵文化財セミナーや小さな展覧会をはじめ、「関西考古学の日」関連事業、向日市まつりへの参加等の普及啓発活動を行っています。

埋蔵文化財セミナー

第128回埋蔵文化財セミナーを、8月24日(土)向日市民会館第1会議室で実施しました。

今回のセミナーでは、『京都の中世社会を解明する－平成25年度京都府内遺跡発掘調査成果速報から－』をテーマとして、「1. 中世のムラ・館－京都・北から南から－」、「2. 中世 やかたの暮らしぶり－向日市上植野城跡の調査から－」、「3. 『第29回小さな展覧会』のみどころ」の3本の発表を行いました。

第1題では、京都の中世社会について、主に土器の視点から読み解き、平安京・山城・丹波・丹後の地域色を明らかにしました。とくに首都機能をもつ京都では、一定量の地元産の土師皿と、全国各地から集積する陶器類、さらには海を越えて海外からもたらされる貿易陶磁器が組成する



第128回埋蔵文化財セミナー



第29回小さな展覧会

のに対し、同じ京都府でも山城・丹波・丹後では、都と大きく異なった土器文化の様相を示すことを事例を挙げて紹介し、そうした違いが生まれる背景を多角的に考察されました。第2題では、開催地乙訓地域に焦点を当て、この地域の中世城館の特質をわかりやすくまとめられました。中でも、文献にみえる上野秋田氏の居城である上植野城の堀跡の調査成果を材料にして、歴史地理学や実験考古学の視点も交えながら、乙訓地域の中世社会を精緻かつ大胆に読み解かれました。そして、第3題では、向日市文化資料館で開催中の「第29回小さな展覧会」について、とくに注目すべき展示を紹介するとともに、職員一丸となって取り組んだ様子を紹介しました。

当日は受付時間帯に一時天候がくずれましたが、83名の参加者を得て盛況のう

ちに無事終了することができました。

第29回小さな展覧会

平成25年度に発掘調査・整理作業が実施された遺跡を中心に、その成果を「京都府内遺跡発掘調査成果速報」として展示し、併せて速報展示の一部として「中世京都のおもてなし」と題して企画展示を向日市文化資料館を会場に行いました。8月16日(土)から9月7日(日)の会期で、のべ19日間で1,824名の入館を得ました(本誌別掲)。



第29回小さな展覧会

現地説明会・現地見学会

8月17日(日)に京都御所の東側に位置する京都府立鴨沂高等学校において、寺町旧域・法成寺跡の現地説明会を実施しました。豊臣秀吉による京都の都市改造「寺町」に関わる礎石建物跡や、大火の後に数度にわたり整地されて土地利用された様子などについて解説すると



法成寺跡・寺町旧域現地説明会

ともに、京都府教育委員会が同校北校地内で実施した立会調査で出土した緑釉瓦を公開しました。藤原道長が創建した「法成寺」は、調査地の北側に展開している可能性が高まりました。当日は猛暑日にも関わらず、209名の方々が往時の姿の解説に熱心に耳を傾けておられました。

10月19日(日)に、城陽南団地第2自治会の主催により、城陽市教育委員会が開催した「城陽古代遺跡」の一環として、城陽市下水主遺跡の現地において見学会が行われ、53名の参加がありました。

10月27日(月)には、一般社団法人京都建設業協会による「親子でまなぶ京都の建設土木」イベントの中で、下水主遺跡の現地見学会が開催され、約160名の方が、発掘現場で調査の様子などを熱心に見学されました。

「関西考古学の日2014」

「関西考古学の日」は、全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロック13加盟法人が、各機関で実施している講演会や体験講座などの催し物を9月から11月に集中的に実施する連携事業です。特に、10月第2土曜日には、共同で記念講演会を開催しています。今年度で7年目をむかえる「関西考古学の日」ですが、その存在が広く周知されるようになってきています。

当調査研究センターでは、関連事業として「夏休み考古学体験講座」と「秋の考古学講座」を開催しました。夏休み考古学体験講座は、乙訓管内に所在する小学校の高学年を対象に勾玉づく



関西考古学の日勾玉づくり



関西考古学の日勾玉づくり



向日市まつり泥めんこ遊びと拓本体験

りを当調査研究センター研修室で8月20日（水）と30日（土）の午前と午後の4回実施し、105名の参加がありました。隣接する向日市文化資料館で同時開催していた「小さな展覧会」で出土した勾玉を実見しての勾玉づくりができました。

一方、「秋の考古学講座」は、10月18日（土）に肥後総務課長が「邪馬台国時代の近畿」と題して講演し21名の方々に聞いていただきました。また、11月15日（土）の石井調査課長による「縄文丸木舟」講座には、10名の参加者があり、考古学の楽しさを感じていただきました。

「向日市まつり」

11月15日（土）・16日（日）の2日間、向日町競輪場を会場として繰り広げられる全市的な向日市まつりに『ドキ土器！むかしたいけんクラブ』と題して、公益財団法人向日市埋蔵文化財センターのご協力を得て初めてブースをもちました。

当調査研究センターは、『江戸時代の泥めんこと拓本体験』と称し、模造の泥めんこによるおはじき遊びと、参加者が拓本を経験し、手拓を持ち帰っていただきました。ご家族も含め、95組の方々に江戸時代のあそびと拓本の美しさを感じていただきました。

2日だけの催し物でしたが、さらに工夫をすることで、もっと身近に考古学を体感していただく企画を組んでいきたいと思っています。乞うご期待！

（小池寛・伊賀高弘）

センターの動向

(平成26年7月～10月)

月日	事項
7 10	出雲遺跡(亀岡市)終了
12	鴨沂高校(京都市)体験発掘
14	出雲遺跡引渡、由良川小学校大川遺跡見学
23	長岡京連絡協議会
8 17	鴨沂高校(京都市)現地説明会(209名)
20	「関西考古学の日」夏の体験講座「勾玉をつくろう」(53名)
23	第128回埋蔵文化財セミナー(於：向日市民会館、83名)
27	長岡京連絡協議会
30	「関西考古学の日」夏の体験講座「勾玉をつくろう」(52名)
9 7	小さな展覧会閉幕(1,824名)
24	長岡京連絡協議会
10 18	「関西考古学の日」秋の考古学講座「邪馬台国時代の近畿」(21名)講師：肥後総務課長
22	長岡京連絡協議会
25	乾谷遺跡(精華町)発掘調査開始
27	下水主遺跡(城陽市)現地見学会(一般社団法人京都府建設業協会、親子でまなぶ京都の建設土木、約160名)

編集後記

寒気がことのほか厳しい冬を迎えておりますが、今年度の第2冊目となる『京都府埋蔵文化財情報』第125号が完成いたしましたので、お届けします。

本号では、平成26年度の京都府内における埋蔵文化財の調査成果をいち早くお伝えするとともに、当調査研究センター職員による論考、さらに、「関西考古学の日」に関連する事業の報告、今回、初めて参加した地元の向日市主催の文化的イベントへの参加報告などを掲載いたしました。

ご一読いただければ幸いです。

(編集担当 伊賀)

京都府埋蔵文化財情報 第125号

平成 27 年 1 月 30 日

発行 公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター

〒 617-0002 向日市寺戸町南垣内 40 番の 3

Tel (075)933-3877(代) Fax (075)922-1189

<http://www.kyotofu-maibun.or.jp>

印刷 三星商事印刷株式会社

〒 604 - 0093 京都市中京区新町通竹屋町下ル

Tel (075)256-0961(代) Fax(075)231-7141